

ロンドンで会おう

SEE YOU IN LONDON

いしかわじゅん



角川文庫

ロンドンで会^あおう

いしかわ じゅん



角川文庫 8275

平成三年九月十日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二丁目十三—三

電話 編集部(〇三)三八一七—八四五二

営業部(〇三)三八一七—八五二二

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——暁印刷 製本所——本間製本

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

ロンドンで会おう

いしかわじゅん



角川文庫 8275

目次

序章	機上より始まる	五
第一章	思い出が街 まち にいる	一五
第二章	海の街へ	六
第三章	ザ・マーケットの危機	二七
第四章	愛の終わり	二〇九
終章	日本へ	二六
解説		三三
火浦功		三三

序 章 機上より始まる

1

暗い機内から眼下に目を落とすと、うっすらと雪を被った連山があった。山々は視界の前方から始まり、重なり合って盛り上がり、後方の闇に消えていった。

「日本アルプスか……」

私は小さく呟いた。

隣の座席から、熟睡していたとばかり思っていた万里子がむっくりと起き上がり、アイマスクをはずした。湖のように深い色をしたその瞳は、まだ半分眠りの中にあり、しっかりと焦点を結んではいなかった。右目は確かに私を見ていたが、左目はふたつ前の席の、禿親父の後頭部を凝視していた。

「南畑先生……、おくつろぎのところ大変失礼ではございますが、担当編集者といまして訂正させていただきますれば、わたくしどもが成田を飛び立ちましてもう十時間以上

経過いたしておりますので、とうに日本上空は通り過ぎております。したがいまして、あれは真正銘しょうしんしょうめい本場物のアルプスでございます。つまり、ここは既にヨーロッパ上空でございますわ」

「なにヨーロッパだと、そんなバカな。いいかね万里子くん、私は小学校時代、社会科には強かった。私の通っていた小学校では社会科王と呼ばれていたくらいだ。その私が断言するが、この飛行機はさっき伊豆半島上空を過ぎたばかりだぞ」

万里子は華奢きやしやな指につまんだリバティプリントのハンカチを口許にあて、田舎いなかの校長先生のようにに小さい咳せきをした。キャサリン・ハムネットの胸元からのぞく肌が、眼下の雪のように白かった。

「先生……、非常に僭越せんえつではございますが、先生のごらんになられました伊豆半島は、おそらくヨーロッパの伊豆半島とも呼ばれておりますイタリア半島であろうと推察いたします次第でございますわ」

「うむ、そうか……、なるほどイタリアか……。そういえば私が小学校時代強かったのは、社会科でも歴史方面だったような気がするな。私の通っていた小学校では、私は歴史王と呼ばれていたくらいだ。そうだ、確か地理にはからきし弱かったのだ。私は三年ほど前まで、麻布あさふというのは日暮里にっぽりの隣にあると思っていたからな」

私は座席を起こすと読みかけの本を閉じ、残りの本と共に足元に積み上げた。ベテラン

少女漫画家〔身内すずえ〕の大傑作大河大演劇大ロマン『ガラスのお面』は読み始めると止まらないとは聞いていたが、これほどとは思わなかった。

「あら……、成田を出てから今までにもう三十巻もお読みになったのでございますか。さすがでございますわ」

万里子が欠伸を噛み殺した。今時アヌーク・エーメのような少々くどいアイメイクに涙が滲んだ。もっとも、どんな化粧をしたところで、それは万里子の美しさを損ないはしない。たとえば・三波伸介の十八番、ほかむりの泥棒のメイクをして口の周りをドーランで真っ黒く塗って出場することを条件づけられたとしても、私はミス・ユニバース日本代表に万里子を推薦することを躊躇しないだろう。

「いったい幻の戯曲『紅天井』はいつ上演されるのだ。いや、第一、あれはいったいどんなストーリーなのだ。それが知りたくて、つい読みこんでしまった」

「文壇でもそれは常に話題の中心でございますわ。先年お亡くなりになった文豪の石川淳先生なども、臨終の床で、『紅天井のシナリオが読みたい……』とお呟きになって、がっくりと頭をお垂れになられたそうでございます」

「うむ、それは私も山田風太郎の『日本臨終辞典』で読んだ」

手を上げると、張りつけたような笑顔で、スチュワードスが新聞を持ってやってきた。

「東京スポーツはあるかね」

「申し訳ございません、これだけしか……」

スチュワーデスは大手新聞社系の毒にも薬にもならないスポーツ新聞を示した。私は二、三紙を適当に選び、膝の上に広げた。どの新聞も、日本で大スターが死んだことを告げていた。峰岸八重子。戦前戦後の映画界を通じて、大スターの座を守ってきた女優だった。私の父親の世代あたりには、彼女が一生を排便をせず^{はいべん}に終えたと信じている者もいるだろう。それくらいの大スターだった。

「まあ、またどなたがお亡くなりになられたのでございますか。つい先日、村田春夫先生と大空はるみ先生が相次いでお亡くなりになったばかりでございますのに」

戦後の芸能界を支えてきた大物スターが、最近ばたたと死んでいた。それもみな、曖昧な死因ばかりだ。一応、心不全などと発表されてはいたが、マスコミ内部にいる者で、それを信じている者はいなかった。なにかありそうだ、という予感で、警察とかなりの数の出版社が動いているという噂だった。もっとも、私の執筆している雑誌とは、あまり関係はない。

「わたくしの同僚で実話誌の編集をさせていただいております者も、病院関係やご遺族周辺をさかんに洗っておりますようでございましたわ」

「まあなにがどう転んでも、私には関係のない話だ」

私は大きく伸びをして体をほぐし、窓外に目をやった。涯の知れぬ闇の奥底から、かす

かに朝の燭光^{しよつこう}が洩れてきていた。先刻の伊豆半島がイタリアだとすれば、ロンドンもおそらくこの近くに違いない。地図はうろ覚えだが、イタリアとロンドンは、確か隣同士だった。そう確信できる。私は小学校時代、確信王と呼ばれていたくらいで確信には自信がある。長かったこの空の旅も、ようやく終わりに近づいたということだ。

「緑子^{みどりこ}……、待っていてくれ」

私は小さく呟いて座席ベルトを外し、万里子の細い肩に手をかけて通路に出た。私の足をよけて細い足首と腰を捻^{ひね}ると、淡い香水が、クリスタルのイアクリップに輝く万里子の耳朶^{じだ}から立ち昇った。ヘチマコロンだった。

万里子の属する^(株)大日本帝国出版、略して日帝出版^{にってい}は、私の分しかファーストクラスのチケットを用意しなかった。万里子はエコノミーの、それも補助椅子^{いす}の席だった。私は飛行機にも補助椅子があるのを初めて知った。私を、南畑剛三^{なんはつこうさう}を、世間ではハードボイルド作家などと呼んでいるようだが、本質的には「男を描く作家」と私は自分を定義している。男として、一介^{いっかい}の担当編集者とはいえ、女をエコノミーの補助椅子に座らせて太平洋を越えるわけにはいかない。いや、越えるのはインド洋だったかもしれない。恐らく西インド諸島は確実に越えるだろう。私はすぐチーフオフィサーを呼び、私の払いでファーストクラスの補助椅子に変えさせた。私は、男を、男の心のありようを描く作家だ。

ぐっすり眠りこんだ機内の客の間を擦り抜けて、私はトイレに急いだ。読書に夢中にな

っていて、私は随分長い間、用を足すのを忘れていた。ビールとワインを多量に摂取し続けた結果、既に膀胱は限界にまで膨脹していた。

ラバトリのベイカントの表示を確かめ、私はノブを引いた。

男が立っていた。

頭からストッキングを被り、右手には鈍く光るナイフがあった。押し潰された巨大な鼻と緑の瞳が、男が東洋人ではないことを示していた。

「ノー」

私は男に首を振った。

「ノー、アイム ストレイト」

男も私に、黙って首を振った。

外国に出ると、私はゲイに言い寄られることが度々ある。口髭をたくわえ、短い髪をし、比較的筋肉質の体をした私は、その種の男たちからは同志に見えるらしい。美しさは、私の罪ではない。私は、男を描く作家だが、男とベッドを共にしたことはない。学生時代、コンパで飲んで騒いだ後、級友の下宿で雑魚寝した時にも、たとえ重なり合って眠っても、間違いを起こしたことはなかった。私には、男とことをおこなう才能はない。

ストッキングの男が低い声で、なにごとかを私に告げ、空いた左手を掌を上にして出した。私には男の英語が聞き取れなかった。私は大学ではESSに所属していた。英語のヒ

アリングには自信がある。おそらくこの男は発音が悪い。その上、情事の才能がない。無理強いとはいえず、これから初めての相手とことに及ぼうというのに、こんな汚い声を出すべきではない。私は新しい女をベッドに押し倒す時には、シャルル・アズナブールの声で女の耳元で囁く。女子高生から銀座の女まで、どんな女でも五分以内にシーツの海にくずおれたものだ。いや、ひとりだけ例外はあった。マンシヨンの管理人の女房だ。しかし、あれは年のせいで耳が遠かったせいだ。つまり、不可抗力だ。耳さえ聞こえれば、男の場合も同じはずだ。

男が少し声を荒らげて私の心臓にナイフを突きつけ、掌を数度上下させた。男の鼻息が荒くなっていた。仕方がない。こんなところで処女を失うとは思わなかったが、これも経験だ。経験こそが、作家を育てる。ハメットもチャンドラーも、ヨーロッパ上空を飛行中に男と性交したことは、恐らくないだろう。私はハードボイルド作家史上初めて、それを体験する。それもいいだろう。

私はズボンのジッパーを下げ、それを出すと、少し背伸びして男の掌に載せた。大声を出して、男が私の物を振り払うのと、中年女の金切り声が私の後ろで轟いたのは、ほぼ同時だった。

早朝の空港を覆うように霧雨が煙っていた。ロンドン郊外ヒースロー空港。日本からのほとんどの飛行機は、この空港に到着する。

冷たい空気は私の背筋を伸ばした。雨雲は重くたれこめ、郊外の風景を濡らしたが、私は胸が躍るのを押さえられなかった。

私と緑子が青春の一時期を過ごした街、青春を浪費した街に、私はまたやってきた。もう二度と訪れまいと決心していた街。しかし、必ずまたやってくることを確信していた街だった。

私と万里子は、イミグレーションに三時間足止めを食った。私の後ろで金切り声を上げた中年女は、私がストッキングの男と男色行為を働いていたと主張した。私が単なる被害者であることを係官に納得させるのに二時間かかり、その係官が私にウィンクをしてトイレに引きずりこもうとすることから逃げるのに、もう一時間かった。

外に出ると、ロンドン特有の暗い陽が雲の切れ間から射し、小止みになった霧雨を輝かせていた。私は雨に顔を濡らし、懐かしい空気を胸深く吸ってから、地下鉄に向かった。

「先生、危ないところでございました。先生の肉体の危機、ひいてはわたくしの責任問題にもなるところでございましたわ」

スーツケースを引きずりながら、万里子が微笑んだ

「南畑剛三が機内でオカマを掘られたと、上司に報告するつもりだったのかね」

「あの、いえ……、それは……」

霧雨に濡れた長い髪が、薄紅に染まった豊かな頬を隠した。周りに人がいなければ押し倒していただろう。慎ましい両親に慎ましく育てられたおかげで、万里子は自分が美人であることに気づいていない。そうでないとしたら、そう考えることを罪悪だと思っている。どんな高価なスーツを着、どれほど完璧に装っても、必ずどこか一点抜けているのは、あるいは自分の美しさへの免罪符なのかもしれない。

「しかし、私も今まで数え切れないほど飛行機の旅はしたが、トイレで男色を挑まれたのは初めてだよ」

私は万里子に肩をすくめた。

「本当に、その、男色方面の方だったのでございましょうか。それ以外の目的が、ひょっとして……」

「きみ、万里子くん。やつは私の陰茎を掌に載せることを要求したのだ。それ以外のどんな目的があったというのだ」

犯人は金切り声を上げ続ける中年女を突き飛ばし、ビジネススクラスの座席に逃げ込んだ。私が後を追って、ファーストクラスとビジネスクラスとを隔てるカーテンを開けた時には、

犯人は既に一般客に紛れこみ、暗いフロアからはかすかな寢息と、寢返りをうつ椅子のきしみが聞こえるだけだった。

甲高い警笛を鳴らし、地下鉄がホームに入ってきた。私は一步踏み出した。横に立っていた鼻の大きな緑の目をした男が、脅えたように退いた。

「あの……、先生……、まだおズボンのジッパーが……」

万里子が視線をそらしながら、遠慮がちに私のズボンを指差した。

「おお、そうか。すっかり忘れていた」

私は勢いよくジッパーを上げ、地下鉄に乗りこんだ。空気の盛大に洩れる音がし、扉が私の後ろで閉まった。

ロンドンへ、私はロンドンへやってきた。緑子の待つロンドンへ。

第一章 思い出が街まちにいる

1

「本当にこのあたりなんでございますか、その、奥様のお宅は……」

「元・奥様だ」

「は……、元……でございますね、申し訳ございません」

トットナム・コート・ロードで地下鉄を降り、チャリング・クロス・ロードからソーホーの入り組んだ路地を、ブック形式になった地図 *ALTON* を片手に、私と万里子は既に二時間歩き回った。降るか降らぬか、古都を覆う幻おほまぼろしのような霧雨に、ふたりの肩が重く濡れた。私は日本橋高島屋で買ったばかりのイタリア製の靴がまだ足に馴染まず、歩き始めて一時間で、両足に大きなマメができた。しかし、国際電話で緑子が私に教えたホテルは、どこにもなかった。

「ちょっと失礼いたします」

万里子は私の手元のメモを覗きこんだ。のぞしかし、何度見ても同じことだ。そこには私が